

相良匡俊著

『社会運動の人びと』

——転換期パリに生きる』

評者：中野 隆生

相良匡俊の遺稿集である。2013年に逝去した著者は、かつて歴史学界で一時代を築いた社会運動史研究会を舞台に、19・20世紀転換期フランスの革命的サンディカリズムを論じて異彩を放った歴史家として知られる。社会運動史研究会で活動をともにした仲間6名の関与で誕生した本書は、1968～84年に発表された革命的サンディカリズムやそれをめぐる労働運動、社会主義運動を扱った論文5本とエッセイ1本、および加藤晴康による解説で構成されている⁽¹⁾。

I

最も早く1968年に公表された冒頭の論考「革命的サンディカリズムについて」は、当時、新たな研究課題として注目されていた革命的サンディカリズムへ立ち向う若き相良匡俊のマニフェストである。マルクス主義的歴史観を踏まえて社会主義運動や労働運動が語られていたころ、フランスのサンディカリズムはアナーキズムとの思想的な関係において理解されていたが、高度成長をへた1960年代末にいたって、世紀転換期社会の全史的展望を開き、価値あるメッセージをもたらしうる研究テーマとしてフランス近現代史研究の一大焦点をなした。この運動について、相良は、1890年代特有の状況

のなかで、基幹産業の熟練労働者の運動が他の諸運動を巻き込んで形成されたもので、フランスではここにこそ根源的な帝国主義批判を見出しうると主張する。他方、革命的サンディカリストはアナーキズムから用語を借用し、もとは違う意味をこめたとの見通しのもと、アナーキズムとサンディカリズムの間には考えられてきた以上の距離があったとして、この労働運動は自らの世界が時代の変化で破壊されつつあった熟練労働者からする社会批判であり、未来社会建設への努力であったと述べる。それ以降の歴史的展開をも見据えつつ、基本的な視座はすでに定まっている。

II

「1890年代のフランス社会主義運動——第六区革命的社會主義者連合」（以下、「1890年代の社会主義運動」と記す）、「社会運動史の方法のために——革命的サンディカリズム研究の回顧」（以下、「社会運動史の方法のために」と記す）は、いずれも社会運動史研究会の機関誌『社会運動史』に掲載された論考である。相良の代表作と目される前者は1974年に公表された。後者については、1977年と1979年の2度にわたって掲載されたものが、本書では一つにまとめられている。

「1890年代の社会主義運動」で扱われるのは、パリにおいて革命的サンディカリズムの展開にかかわった社会主義者（アルマヌ派系）の地域グループ「第六区革命的社會主義者連合」である。伝統的なパリの労働者地区で1893年に誕生した地域グループの再構成をめざして、著者は、幾多の模索や反省を重ねながら、またパリ警視庁歴史文書館の所蔵資料にもとづきつつ、まず、日常的な定例集会、メーデーなどの年中行事、プロパガンダと資金集めのための家族パーティー、民衆パーティーを初めとする催

物、下院議員や市議会議員の選挙への関与、等々、「グループの行動様式」を明らかにする⁽²⁾。次いで、「グループの構成メンバー」をとらえようと、グループの規模、メンバーの属性、グループへの加入や離脱の動機に光を投げかける。また、グループの掲げた綱領がメンバーにとってもった意味を問い、言葉がまずもって「合い言葉」として機能していたことや、党派性をめぐって一種の無節操さが認められることを示して、「グループの思考と表現」が今日のあり方とはまるで違っていたという。つづく「グループと外の世界」の節によれば、議会主義へ傾く社会主義の流れ、および社会全体の趨勢のなかで、第六区革命的社会主義者連合は変化を強いられ、ブランキ派の一下部組織と化し、やがて資料上にも登場しなくなる。

このように、数十人ほどの社会主義者グループをめぐって様々な問いが立てられ分析が加えられる。この小グループにかんする第一次史料（ほとんどが警察のスパイの報告類）は恵まれた残存状態にあり、おおいに活用されている。もちろん、すべてについて史料が見出されるわけではなく、しばしば推論や仮説をまじえての論述がなされるが、そうした問い、分析、叙述には、やがて労働大衆の生活や彼らの世界を明らかにしようとするベクトルが孕まれている。

急進展した革命的サンディカリズム研究のあり方を改めて検討した「社会運動史の方法のために」では、谷川稔から喜安朗へ投げかけられた疑問を手掛かりに論が進められる。思想史的方法を俎上にのせる第1節「運動と思想」は、サンディカリストがジョルジュ・ソレルの流れをくむ雑誌に寄稿していたことなどもあって、ソレル思想の影響を重視する見解が一般的であった状況を前提として書かれている。著者はいう。当時の人びとは自らの「志向」⁽³⁾を言語によって表現したわけではなく、むしろ「志

向」は人柄、身振り、口振りなど、非言語的なものを介して伝わったから、ソレル系の雑誌への寄稿は必ずしもソレルの影響を意味せず、それゆえソレルを捨象して革命的サンディカリズムをとらえる喜安の方法は妥当である、と。それでは、立場を表明する場（ここでは雑誌）がただちに当人の立場を示すような関係がまだない世界で生じた革命的サンディカリズムの「志向」はどのようにとらえられるのか。たどられるべき研究の手順として、社会空間の分析、「志向」を表現する形態と内容にかんするデータ蒐集、当時の表現形態に即した言語の読み取りがあげられるが、しかし、それ以上の立ち入った言及はなされない。ただ、人びとの思いや考えが言語的表現と厳密に結びついてはいなかった社会とそこにおける社会運動を追うことで、私たちが忘れてしまった価値を発見し、現在おこなわれている発想や概念の性格が浮き彫りできるというのである。

「社会運動史の方法のために」の第2節「運動と状況」では、革命的サンディカリズムの政治史的分析について4つの角度（ミリタンと大衆、運動と組織、革命的なものど改良的なもの、歴史学上の政治性と政治史の歴史性）から検討が加えられる。そこから導き出されるのは、労働運動の上層と下層の間には乖離もあれば疎通もあったこと、フランスの労働組合の低組織率は社会のあり方に由来し、ただちに運動における大衆的質の欠如を意味するわけではないこと、19・20世紀転換期の労働運動ではその運動体的構造のゆえに革命的なものど改良的なものの色分けは明確ではなかったことなどである。しかるのち、喜安朗の革命的サンディカリズム研究⁽⁴⁾もまた、観察対象たる過去の状況を現在とのアナロジーでとらえる政治史的手法の系譜にあるとして、その場合、歴史家が自ら設定した状況に見合う項目に限って観察がなさ

れるがゆえ、革命的サンディカリズムのもつメッセージの豊かさが見落とされると疑念を表明する。かの時代の人びとが職場、学校、家庭、街、労働組合など、日常生活のあらゆる側面を介して社会に統合されていたからには、政治的事象を論じるにも社会生活を全体として視野におさめてなされるべきであり、さもなければ、議会主義への傾斜のなかで政治の比重が増大し、革命的サンディカリズム率いる労働運動が変質していく意味もわからないであろう。こうして、「労働者が、社会に対して自己を主張する際、直接に生活の場で、直接に身体的行動によって表現していた頃から、議会において、代表者により、したがって票と言論を用いて表現する時代に至るまでの変化や、政治が労働運動の時折のひとつのテーマであった時代から、思考や行動のほとんど唯一のテーマとなる時期に至るまでの変化や意味を追跡し、確認すること」⁽⁵⁾が最も重要な政治の歴史的研究の課題であると述べる。

「社会運動史の方法のために」は革命的サンディカリズム研究にかんする方法的省察であるが、しかし、「1890年代の社会主義運動」と同様に、最終的な関心は、民衆の生活や思い、心のあり方、それらを内包する社会へと向かうように思われる。とりわけ第1節にあって、明白に「1890年代の社会主義運動」の延長線上で革命的サンディカリズム研究の論点が深められている。また、「1890年代の社会主義運動」でほとんど触れられない政治を論じる第2節でも、やはり労働運動や社会主義運動を手がかりとして民衆の世界へ迫る姿勢は一貫しており、労働大衆、また下層ミリタンに寄り添おうとする。「1890年代の社会主義運動」や「社会運動史の方法のために」における問いや論述は、流麗洒脱な文体も手伝って、執筆から40年をへてなお新鮮かつ魅力的であるが、その所以はこ

のあたりの姿勢や発言に存すると思われる。とはいえ、『社会運動史』当時の課題状況にこだわりつづけたのもまた相良匡俊であり、その後の研究は労働運動、社会主義運動との絡みで展開した。

III

1981年に公表された「労働運動史研究の1世紀——フランス1890～1980年」(以下、「労働運動史研究の1世紀」と記す)は、研究を担った人物や著作、あるいは出版社など、具体的な事実をとらえて、フランスの労働運動史研究の推移を明らかにした論文である。ブルジョワ知識人による社会批判として起動したパイオニア的な労働運動史研究が、両大戦間期から第二次世界大戦直後までの党派的な研究をへて、とりわけ1960年代以降、現実政治とのかかわりを希薄化させながら、反面で大学の一角に根づいていく、その過程が説得的に語られる。ここでは、『社会運動史』掲載の論考に比べて、著者特有の文体はやや後景に退いている。掲載誌も違えば目的や狙いも違う、相良の立場も変わっていたから、特段の不思議はないが、そこには社会史的方法の浸透、定着という歴史認識上の変化も作用していたに相違ない。評者自身、1978年から81年まで北フランスのリールに留学し、繊維業労働者にかんする実証研究に取り組んだが、まるまる3年をへて帰国したさい、日本のフランス近現代史研究の対象地域がパリからフランス各地へ拡大したと、大きな変化を感じたものである。パリを中心にした革命的サンディカリズムに焦点を置く労働運動史研究の時期をへて、独自の眼差しのもとに書かれたサーヴェイ論文、それが「労働運動史の1世紀」であった。その末尾で、著者はフランスにおける労働運動史研究の将来を次のように見通している。労働運動史研究はあらゆる社会的運

動を全般的に扱うものへと発展しようが、生きた労働者があるかぎり、労働者像は日常生活における居心地や歯車仕掛けの社会における人間らしさを求める姿において見直されるであろう。たとえ官許アカデミズムに労働運動史が閉じ込められても、新しい関心と主張は在野の研究としてつねに生まれ、それゆえ「労働運動史研究は、どこへも行かない」⁽⁶⁾。優れた見通しであったと思う。しかし、20世紀末以降の激変を背景に、フランスの労働運動、社会主義運動にかんする歴史研究の変化はおそらく著者の予想を大きく超えていた⁽⁷⁾。

IV

「1890年代の社会主義運動」や「社会運動史の方法のために」において、相良匡俊は、労働運動、社会主義運動にたいする強い関心を保ちながら、労働大衆の生活や思いに肉薄して、そこから諸運動を理解しようと、多様な角度から柔軟に問いを投げかけ、流麗洒脱な文体を駆使しつつ社会運動史研究の歩むべき方向を指し示そうとしていた。やがて社会史の定着とともに、ソシアビリテ（社会的結合）やマンタリテ（心性）といった概念が導入された。しかし、著者の場合、そうした概念に言及することなく、むしろ実質的に自らのものとして、具体的な事実のデータを分厚く積み上げ、それにもとづきつつ、社会的諸運動との絡みで選び取られた主題（出版活動、シャンソン）に即した歴史的コンテクストを読み取ろうとしつづけた。ここにはおそらく、パリの社会運動史＝労働運動史研究センター（現在の20世紀社会史センター）で学び取った視座や方法が刻印されており、そうした研究姿勢の一端は、最後に置かれた論文「フランス左翼出版物の系譜——1880～1930年」で、革命的サンディカリズム時代のパンフレット類から両大戦間期の共産党関連

出版物にいたる出版スタイルをたどろうと、網羅的な文献情報をベースに、執筆者、印刷所や出版社、体裁など、具体的事実にかんする問いが立てられ回答が試みられるところにも窺われる。この場合、分析の目的や対象の限定もあって社会的諸運動の孕む「志向」や、労働者の生活、思いへの言及はほとんどない。しかし、社会主義者地域グループや革命的サンディカリズムに即して、労働者や生活や思い、また彼らに近しい社会的諸運動の「志向」へ迫ろうと、あれだけ多角的に、また多彩に問いを重ねていた著者である、もっと自由に労働者、民衆をめぐる諸事象を取り上げ、豊かに自在に発想を重ねて、下層の人びとの世界やそれをめぐる社会のあり方を生き生きと照射してほしかった、いまなお評者はそう考えるのである⁽⁸⁾。

かつて社会運動史研究会の末端に連なった評者には浅からぬ個人的な縁もあって、本書を手にして懐旧の念を禁じえなかった。例えば、1984年のエッセイ「河岸の古本屋のことなど」に語られるセーヌ河畔の古本屋、フェルディナン・トゥーレとの光景。「そういうとき、彼は気がつけば私にヒョイと手を上げて、田中角栄式の挨拶なぞを送ってくれた。私は好き勝手に本を選び、買う物がないうときにはヒョイと手を上げて別れることにしていた」⁽⁹⁾。在りし日の相良匡俊の姿が思い出され、とてもとても懐かしい。心から御冥福をお祈りしたいと思う。（相良匡俊著『社会運動の人びと——転換期パリに生きる』山川出版社、2014年9月、253＋4頁、定価5,500円＋税）

（なかの・たかお 学習院大学文学部教授）

-
- (1) 谷川稔による書評（『史学雑誌』124-11、2015年）も参照されたい。
 - (2) 「グループの行動様式」について運動の「伝えられるべき志向の抽出ができていない」と、

- 相良は「社会運動史研究の方法のために」の註47において振り返っている（本書127・138頁）。
- (3) 「運動と思想」の節では「志向」という言葉が繰り返し使われている。
- (4) 喜安朗『革命的サンディカリズム——パリ・コミューン以後の行動的少数派』、河出書房新社、1972年など。
- (5) 本書178頁。
- (6) 本書218頁。
- (7) 日本での研究のサーヴェイではあるが、中野隆生「日本におけるフランス労働史研究」（『大

- 原社会問題研究所雑誌』516、2001年）を参照。
- (8) 相良匡俊「フランス共産党の出版活動の成立」『村瀬興雄先生古稀記念論集』1983年；「1920年代のフランス共産党の出版活動——1921～1930（1）目録」『社会労働研究』第36巻第4号、1990年；同「1920年代のフランス共産党の出版活動——1921～1930（2）数量的分析」『社会労働研究』第39巻第4号、1993年なども参照。
- (9) 本書188頁。

21世紀の
若者たちへ

五十嵐仁著
現代日本政治
「知力革命」の時代

神山美智子著
食品の安全と企業倫理
消費者の権利を求めて

二八〇〇円
一八〇〇円
一五〇〇円

福島大学つくしまふくしま未来支援センター編
福島大学の支援知をもとにした
テキスト災害復興支援学

二〇〇〇円

福島大学国際災害復興学研究チーム編著
東日本大震災からの復旧・復興と国際比較

二八〇〇円

境野健児・千葉悦子・松野光伸編著
小さな自治体の大きな挑戦
飯館村における地域づくり

二八〇〇円



日本の
再生可能エネルギー政策の
経済分析

福島の復興に向けて

大平佳男

大平佳男著
A5判 上製 178頁
本体 3000円
ISBN 978-4-86014-079-3

再生可能エネルギーの普及と福島県の復興

再エネの普及について政策の面から検討を行い、
地域経済の活性化に貢献できる、再エネ事業のあり方を検討

八朔社

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館内
TEL 03-3235-1553 FAX 03-3235-5910
Eメール hassaku-sha@nifty.com

刊行書の一覧は版元ドットコムへ
<https://www.hanmoto.com/bd/hassaku-sha>

表示価格は消費税が含まれておりません